足立史談
第694号
2025年12月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
ＴＥＬ 03-3620-9393
ＦＡＸ 03-5697-6562

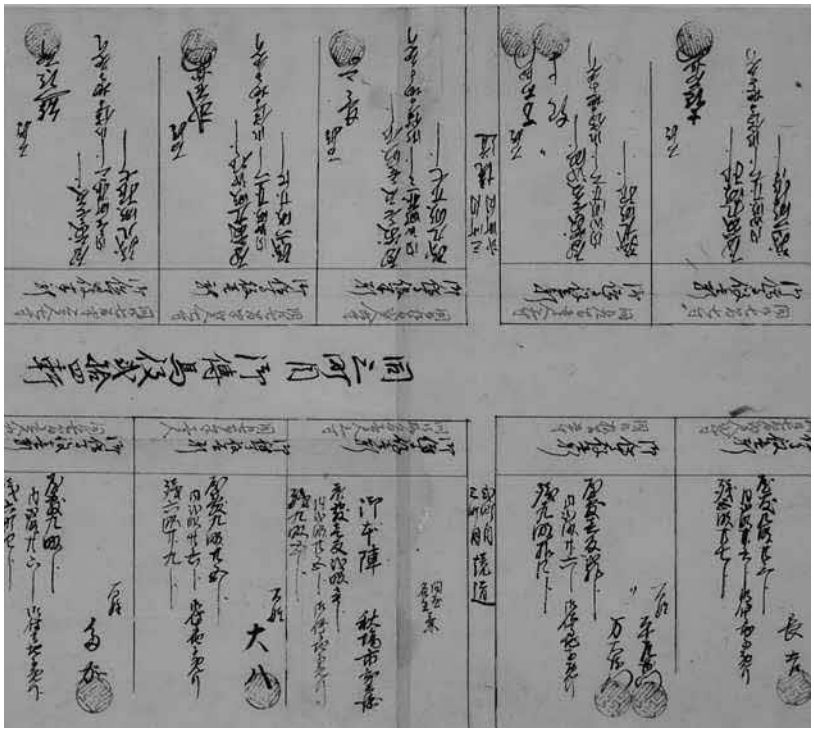
もくじ

千住・足立の武士と町人・百姓（上）…P1　千住四丁目山車・お囃子実演、解体構造見学会、庚申塔祭り…P3　はい、文化財係です49「清水家住宅」特別公開……P4

【特別展　千住宿400年】

千住・足立の武士と町人・百姓（上）

多田文夫



【図１】写真下段中央が「御本陣　秋葉市郎兵衛」
本陣を舞台に、通行者の大名らとの儀礼に、千住宿の重役が「士分」として役割を果たしていた。福島家資料　伝馬割図（江戸後期）郷土博物館蔵

はじめに

文政十三年（一八三〇）五月九日、お昼前に江戸に向かう出羽久保田藩（秋田藩）の第十代藩主、佐竹義厚（さたけ・よしひろ）の参勤交代の行列が千住宿に到着しました。四〇〇人前後の大通行です※。

草加宿から輸送の人馬が千住宿に引き継がれ、佐竹藩上屋敷（現台東区台東三・四丁目。佐竹商店街付近。次頁の図参照）まで輸送する準備が行われました。その間、藩主たちは千住宿の本陣、秋葉市兵衛家（上掲図では別世代の「秋葉市郎兵衛」）で休憩しつつ宿場役人への儀礼が行われました。続いて、そのときの様子を、「御参勤御道中日記」（伊澤慶治編『同』、彦榮堂）という当時の記録からご紹介します。

※　参勤交代は石高によって人数の決まりがある幕府の軍役です。佐竹家は石高約二〇万石で三五〇人～四四〇人と規定されていました。（「秋田県公文書館・秋田県立博物館所蔵近世後期幕政関係史料の調査」、『東京大学史料編纂所報』第二九号）

1　代官手代（てだい）の挨拶

この記録を足立区の視座から見ると、千住宿の役人が登場する興味深い記述があります。

（金）　（代官中村知剛）
一、同弐百疋　右同人御手代
下川八郎兵衛
（金）（代官中村知剛御手代）
一、同弐百疋　同
長野長右衛門（ママ）
（千住宿）
右ハ同所問屋場へ出役致候ニ付、被下候。右同人払。
（御目付朝日正吉払）
（略）

一人目（最初の傍線部）の下川八郎兵衛は千住一丁目の名主を務めた両替商「千寿屋」の当主で、実名を「元享」といいました。二人目の長野長右衛門は、千住二丁目の町役人で神官も兼ねた永野長右衛門です。（文書では長野と表記）永野家文書（郷土博物館蔵）で実名を「忠導」とする人物です。いずれも問屋場役人と考えられます。

幕府代官中村知剛（なかむら・ともかた。八大夫※）の役人として「御手代」と表現されています。敬意を表す接頭語の「御」を付しており記録を付した久保田藩士からは上位者と見られていたことがわかります。

二人とも代官手代（代官の属僚）なのですが、商家の当主です。代官手代は、地元で採用されることが多く、そのまま幕臣となる人々も登場しました。

※　当時江戸の馬喰町詰代官の筆頭でした。引用史料では「八太夫」と記しています。

2　本陣での儀礼

■佐竹家の儀礼　儀礼の記事をさらに読んでみましょう。藩主や藩士たちが本陣の秋葉市兵衛をはじめ千住宿の諸役人と対応した記事です。

一、午ノ刻、千住駅御本陣、秋葉市兵衛へ御休として入りなされ候。同所入口へ御本陣、御飛脚宿、問屋とも罷出披露ばかり。
一、同所入口へ角力（相撲）、出来山、今風罷り出ず。披露無し。
一、同所へ御代官中村八太夫殿御手代出で、披露す。御直礼。御同人御足軽両人御先払ニ出候。
一、同所御本陣へ、かねて御出入の御坊主衆、御小人目付其外御出迎罷出で、御目通し仰せ付つけられ候上、金下されこれ有り候。
（十一人の名前略）

一つ目の傍線部は、代官手代を披露（藩主に紹介）して、「御直礼」と直接面会している記述です。具体的には前段で紹介した下川八郎兵衛と永野長左衛門を含みます。

二つ目の傍線部は、久保田藩佐竹家の家臣のうち、千住宿本陣と普段から交流していた御坊主衆、御小人目付ら十一人が、藩主の出迎えに来たことの記述です。こうした儀礼を約一時間行い、佐竹家は上屋敷（**下図参照**）に向かいました。

■渡辺崋山と藩主の休憩　続いて脇本陣での事例を見てみましょう。同じ年の四月十三日に下川八郎兵衛家は田原藩主の脇本陣をつとめます。

藩主、三宅康直（みやけ・やすなお）は日光祭礼奉行となり日光社参に向かうとき千住で休憩しています。同藩の重臣で文人画家でもあった渡辺崋山とともに下川家を脇本陣として休憩で利用しました（渡辺崋山「全楽堂日録」、『近世文芸叢書第十二、国書刊行会編、一九七六年）。

この例でも下川家とともに代官中村知剛の手代にも金を下賜しています（二百疋）。田原藩邸から「奥方」が見送りに訪れて、見送りをしています。この下川家は浪人由緒を持ち、縁戚に旗本や大名家臣がいる家でした（下川繁三「千住の八郎兵衛」、『足立史談』四二四～九、四二七を除く）。

3　二つの身分

■松平肥後守家中、川住長右衛門の発見　当館で、この二重身分について明らかにしたのが山田拓実「諸藩の公用通行と千住宿御用達―会津藩松平家を事例として―」（『足立区立郷土博物館紀要』第四五号）でした。各藩の御用達商人が千住宿で確認できることを各地の史料から整理した上で、会津藩から「家中」という「士分」（侍身分）を持った川住長右衛門家を見出しました。千住一丁目の平旅籠「倉（鞍）屋長右衛門」とおぼしく、長右衛門は、「松平肥後守内」と会津松平家の家臣としての記録が会津藩の記事に残っていました。つまり、旅籠の経営者（商家・町人）でありながら、士分であったということです。

さらに研究史に基づき江戸時代後期の身分変化は「職分」と「身分」として整理できることも見据えています。

「職分」とは一定期間の役割を果たすとき、具体的には「御用達」や「本陣」などの役割をはたす時に「士分」（侍身分）となることです。

さらに士分への志向が進むと江戸時代の戸籍である町や村の「人別」からはずれ、完全に身分切り替えを行うことがあります。「人別」に記載されるのは、百姓と町人です。士分となると、「分限帳」など、各大名家の家臣の名簿に記載されるようになります。これが本格的な「武士身分」となるという理解です。

【図2　久保田（秋田）藩 佐竹家上屋敷の場所】
「江戸切絵図　下谷絵図」（部分）尾張屋清七板　嘉永2～文久2年（1849～62）　国立国会図書館デジタルコレクションから

■一時的な「士分」　千住宿で大名に面会した本陣・脇本陣の当主や、代官手代は一般的に名字帯刀を行なって「士分」として振る舞い外見は武士でした。

大名と公式の場で面会した下川八郎兵衛や永野長右衛門らが「代官手代」という士分をつとめたのは千住宿の町役人や問屋場役人を勤めている期間内です。役を離れると百姓・町人でした。まさに「職分」として位置づけることができます。彼らの日常は商家ですが、一時的にせよ武家社会の末端に位置しているのも明らかでした。

■消えた「士農工商」理解　現在、

いわゆる教科書（小学校から高校で利用）からは「士農工商」という身分制は用いられなくなりました。研究が進み、現在では江戸時代は「武士」「町人」「百姓」を中心とした身分制であったことが理解されています。小学校では早く平成十二年度（二〇〇〇年度）に、高校でも令和二年度（二〇二〇）を最後に姿を消しました。なぜなら「士農工商」の身分制度自体が存在しなかったからです。しかも身分間の移動事例が数多く報告され完全に固定された身分制では無かったことが明らかになっています。

身分が変った代表例が、幕臣として知られる勝海舟です。曽祖父の銀一は越後国刈羽郡の「百姓」でしたが江戸の検校・貸金業となり、子の平蔵が旗本男谷家や水戸藩士の株を買い「士分」となります。さらにその子の小吉が男谷家から勝家に養子に入ります。そして小吉の子が海舟です。海舟の家は百姓→検校→旗本（士分）という身分的な変遷を経ていました。

■千住宿の武士たち　いっぽう武士身分出身で千住宿に移った人々もいます。千住の琳派絵師として知られる村越其栄は江戸下谷の、幕府御家人、村越辰之助でした（江村知子「村越其栄筆　秋草図屏風」、『國華』一五三一号所収）。ほかに千住掃部宿の家塾主だった多坂梅里も元信州上田藩士でした。ここでみた千住宿が特別だったのでしょうか。

続けて足立各地の二重身分の事例を探ってみましょう。　―つづく―

（博物館学芸員）

文化遺産調査特別展「千住宿400年」関連イベント

千住四丁目山車でのお囃子実演

江戸型山車でのお囃子の実演。地元、千住四丁目で活動する神田囃子千四会のみなさんに山車の上でお囃子の演奏をしていただきます。山車の上での演奏は、少なくとも40年ぶりになります。

お祭りの臨場感をお楽しみください。

日にち　令和8年1月10日（土・無料公開日）

時　間　10時・11時・13時・14時

＊演奏中は館内に音が響きますがご了承ください。（各15分程度）

千住四丁目山車の解体構造見学会

文化遺産調査特別展「千住宿４００年」の開催に伴って、12年ぶりに組み上げた山車ですが、特別展の終了により再び解体し館内収蔵いたします。

解体に際し、江戸型山車のからくりを披露する見学会を行います。

見学内容

人形の下げ降ろし、四方幕などのはずし作業、高欄の下げ降ろし。山車の三層部分の可動の実演まで。

また、山車の構造や人形、懸装品を間で見学できる時間を設けます。

日にち　令和8年1月12日（祝）

時　間　午後2時～3時ごろ

開　場　午後1時30分

当日は休館日となります。開場時間以外は入館できません。また、特別展の観覧はできません。

定　員　50人（先着順）

申　込　不要（当日博物館へ）

＊見学場所は、博物館内2階ギャラリー及び階段です。

＊参加人数によって解体作業が見えにくい場合もあります。多くの方が見えるようにご協力ください。

＊基本的に立ち見見学になります。

＊三脚や自撮り棒などの撮影機材の使用は禁止いたします。

＊作業の進捗により一部見学場所の移動をお願いいたします。

博物館職員の指示に従うようお願いいたします。

足立二丁目の庚申搭のお祭り

足立東町会内に祀られている庚申搭を祭る神事が行われます。

庚申搭は、六十日に一度巡ってくる庚申（かのえさる）の日に行われた信仰で、江戸時代に盛んになりました。「足立史談」第六八四号（令和七年二月）で紹介した足立東町会の庚申搭のお祭りが今年も行われることになりました。一般見学可

日にち　12月21日（日曜日）

時　間　13時開始（およそ40分）

①　足立二丁目31番8号

②　足立二丁目36番4号

①の庚申搭のあと、②の庚申搭に移動します。

はい、文化財係です ㊾
「清水家住宅」特別公開

六町いこいの森（六町四丁目八番）にある「清水家住宅」は、主屋・薬医門・構堀などで構成されており、足立区登録有形民俗文化財（昭和五十七年十二月登録）となっています。

令和二（二〇二〇）年、清水家から区に寄贈され、令和十一（二〇二九）年度の公開を目指して、活用方針を検討中です。そのため通常は非公開となっていますが、皆様の活用アイデア等をお聞かせいただくため、十一月二十二日に初公開されました（主催：パークイノベーション推進課）。当日は、雲一つない晴天の中、二百人を超える人々が見学に訪れ、自由見学のほか、学芸員と東京屋敷林ネットワークによる解説付きのミニツアーが実施され、大変な賑わいとなりました（写真①）。

写真①「清水家住宅」主屋の全景と見学者

そこで今回は、「清水家住宅」についてご紹介します。

■六町地域の歴史　現在の六町地域は、江戸時代に、竹塚村や六月村などの人々が開墾を進めた地域で、江戸時代後期の『新編武蔵風土記』には、民家が二十軒ほどあったと記されています。千住から茨城県下妻市まで続く下妻街道が通り、綾瀬川と接続する吉右衛門堀も竹塚村方面から流れており、交通や用水の関係から周辺の人々が競って開墾をすすめた地域でした。

■清水家の歴史　清水家の初代は天明四年（一七八四）に亡くなっており、古い家であることはわかりますが、詳しいことはわかりません。しかし、清水家は名主を勤めた家と伝わっており、裕福な人を示す「おだいじん」とも呼ばれていたそうです。多くの小作人を抱えており、秋の収穫時期には、清水家に多くの人々が農作物を納めに来たといいます。そうした立場は戦後になっても変わらず、町内運営の中心的役割を担い続けました。清水家は、いわば地域の名士であり、こうした格の高さは、「清水家住宅」の造りにも反映しています。

写真②　奥の間
（左奥が付書院、正面が床の間と違い棚）

■「清水家住宅」の特徴　主屋の創建年代は、建築技法から江戸時代後期の建物と推定されています。関東の農家に典型的な田の字型の間取り（整形四間取）をしており、木材は杉や松・欅などを用い、特に大黒柱には九寸角の立派な欅を使用しています。近年まで実際にお住まいだったため、全体的に改修がなされていますが、基本となる骨組みなどはおおむね創建当初のままとされています。また、屋敷地の外周をめぐる構堀も、発掘の結果、江戸時代から存在したと推定されています。構堀のある家は区内にわずかしかなく、江戸時代から格式の高い造りだったことがわかります。

主屋にある奥の間は書院造となっており、床の間・付書院・違い棚などが設けられています（写真②）。また、薬医門も大変立派なものですが、これらが創建当初から存在したかどうかははっきりしません。しかし、江戸時代から続く清水家の格式の高さを反映して設けられたものであることは間違いありません。

■東京屋敷林ネットワーク　屋敷林も「清水家住宅」の重要な構成要素といえるでしょう。そもそも屋敷林とは、東京屋敷林ネットワークのホームページによると、母屋を北風などの強風から守るために建物を囲むようにして植えられた大きな木で、ほぼ自然の形であることが特徴となっており、剪定・手入れをする庭木とは異なるものだそうです。都市開発や相続などの問題で消失の一途をたどっており、同会はその保全運動を進めています。

※詳しくは「東京屋敷林ネットワーク」のホームページをご覧ください（http://yashikirin.net/）。

「清水家住宅」は、古民家として貴重な文化財です。区では、今後も大切に守っていけるよう活用方針を検討してまいります。

【主要参考文献】
黒津高行「旧清水家住宅の建築的特徴と史的評価　研究ノート―地域文化資産の再発見―」（『日本工業大学研究報告（WEB）』五四号、二〇二四年）

（文化財係学芸員　佐藤貴浩）